

『經濟日本現代文學』④ 現代文學入門

山川書店

鑑賞日本現代文学別

江苏工业学院图书馆
藏书章

現代文学入門

吉田熙生
谷沢永一編

角川書店

鑑賞 日本現代文学

別巻 現代文学入門



昭和60年5月10日 初版発行

編者 谷 沢 永 一
吉 田 熙 生

発行者 角 川 春 樹

発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見2の13

☎ 102 ☎ 東京 3-195208

電話 営業 03 (238) 8521

編集 03 (238) 8451

印刷 凸版印刷株式会社
製本

落丁・乱丁本はおとりかいたします

ISBN4-04-580836-1 C0395

鑑賞 日本現代文学

33 報 月

別 卷

昭和60年 4 月

目 次

方法と芋づる

鈴木貞美

書誌について―文庫本を中心に―

大屋幸世

―近代文学・歴史地理―

子規記念博物館他 四国(二)

森田進

角川書店

方法と芋づる

鈴木貞美

この一か月間没頭していた宮内寒彌の仕事に一区切りつけたのがついさっきのこと、急に頭を切りかえようとしても無理なので、そこから話をはじめるとはならない。

昭和十年に「中央高地」で第二回芥川賞候補にのぼり文壇にデビュー、ひとことでいえば、左傾した日本自然主義の作風に出発したこの作家は、弟の自殺を契機に回想風、私小説風に転じているが、それでも昭和十年代の様ざまな形式上の試みとは無縁ではないし、暗い時代には『現代文学』同人に加わっている。戦後は海軍の実態を下級兵員の立場からリアルに描き出した作品で注目され、戦後風俗にも時代から身を引いた鋭い観察を行っているが、しだいに性風俗を中心とする中間小説に埋没してゆくのが痛いたしい。晩年、「七里ヶ

浜」という作で再び注目を集めたのは記憶に新しいが、一昨年没した。

資料は幸い寒彌自身の保存していたものが基本の手がかりとして得られたので大いに助けられたが、初出不明のものも多く、同時代の評価にもまだあたりきれていない。

諸文学事典で生地は神奈川となっている。本人も回想的作品でそう書いているが、実際は岡山らしい。とすれば、それは郷里に対する屈折した心情が生んだフィクションである。それぞれの時期になかなかいい作品を残している作家なのに、宮内寒彌研究は白紙に近い。

もちろん、日本の現代文学の流れの中ではバイ・プレーヤーである。時代から孤立していたゆえ別の光をあてることで突然輝き出す、といった作家でもない。しかし、バイ・プレーヤーを通して見ると、同時代の作家や作品の陰影が増してくる。たとえば、寒彌が昭和一年の「文藝春秋」六月号に書いた「十一月七日」という作品を青野季吉・小林秀雄らが文芸時評でとりあげている。青野季吉の評の方が作品をよく

つかんでいると私は思う。小林は、作品を理解していないわけではないのに否定に懸命である。そういう小林秀雄が見えてくる。

同じようにして、武田麟太郎や伊藤整やらのそれぞれの時期の陰影が増すし、直接関わりがあった平野謙や坂口安吾らもそうである。

太宰治などの間接資料も出てくる。

私は、日本現代文学研究に有効と思える出来上がった理論などもっていないので、当面、同時代の作家・作品を互いに照射しあわせる作業を続けていきたいと思っている。

そういう作業を続けていると、既成の評価が揺らぎ出す。そして自分自身の中にいつのまにか形成されてしまっている先入観を洗い直すことができる。

宮内寒彌にかかる前の一か月間は、最新作『冬』をもって完結した中村真一郎の『四季』四部作ととりくんでいた。

文芸雑誌の評論の仕事だが、私としてはいわゆる評論も研究も根本のところでは同じつもりでいる。ただ発表の場の規定性があるので、文体や展開のしかたがちがってくるだけの話である。根もとのところで同じというのは、要するに作品の相対的価値をはかるという基本的姿勢は変わらないからだ。

今日生まれたばかりの作品なので、これも白紙に近い状態でとりくんだけわけである。その際に私は、世界の二〇世紀文学の大きな流れの中での作品の位置の測定という方法を試み

た。つまり作品の歴史的相対化を試みたわけである。この作品の意図とその実現された形態の価値をはかるには、それが一番ふさわしいと判断したからに他ならない。

作品をどういうものとして読むかは読者の自由なので、いろいろなものとして読んでみるのも読書の楽しみのひとつなのだし、したがって研究の楽しみでもあるが、『四季』の場合、思想小説として読んでみると、作品を支えているのが、ある日本文化史観であることに気づく。それは、私などが学生時代に読んで影響をうけたと思われる江藤淳の初期評論や吉本隆明の評論活動の底にある日本文化史観と鋭く対立する。両者を検討することは、私たちがもっている日本文化史に関するパラダイムそのものを検討することになってくる。

今日まで日本の現代文学を価値づけてきた評価軸は、ほとんど昭和二〇年代、三〇年代にその骨格を固めてきたものが支配的であり、その形成過程には種々の論争があったにもかかわらず、時代のジャーナリズムが軍配をあげたものが生き残っている。それはそれで文学史的事実ではあるが、こうして形成された見方がいかにやわであてにならないものであるかは、私たちが個々の文学作品や作家の検討に足を踏みいれたとたん、痛烈に実感されることである。ひとつの作品に対する評価の累積をそれぞれの評価の背後にあるイデオロギーを勘定に入れたついでにみるだけでよい。私たちの中に巣食っている戦後のパラダイムはそれによって相対化されるだろ

う。

私が中村真一郎の『四季』にとりくむ前にかかずらっていたのは牧野信一である。牧野信一の評価は、どうやら「特異な私小説作家」というところに落ちついているらしい。これは戦前の山本健吉の評価が、決定的な力をもっているようだ。牧野の評価史はあまり厚くない。厚くないのは、この「特異な私小説作家」という指標のせいだろう。山本健吉が「私小説」と規定した時代と、戦後とでは、「私小説」という語のもつ時代に対する意味あいがあるでちがつてしまっている。同じ山本健吉の「私小説論」に収められた作家でも梶井基次郎は戦後に評価が上がり、そのことによって西欧現代文学との類比で語られることが多くなったが、牧野の場合はとり残された。

何も西欧現代文学との類比で語りさえすればよいというわけではない。西欧現代文学との類比を見つけて値をあげるというのも戦後のなやり方である。

牧野の検討の場合には、薄いとはいえ、既成の評価があるわけで、白紙でかからねばならなかったわけではない。増補版の三巻本全集もあり、保昌正夫の手になる書誌・関係文献もかなりの精度で整っているし、薬師寺正明の「評説牧野信一」を手がかりにすれば関連事項もあらかた探れる。

そこでは既成の評価の検討に力を注げばよい。山本健吉はすでにその秀れた牧野論の中で、牧野が嫌だ嫌だといいな

ら「私小説」を書いていることを指摘しているが、ここに小説の形態を考えに入れると「小説を書く小説」の形態が実は発生しているのだ、それらは「私小説」批判を内在させた「私小説」だった。こういうことに気づいたのは石川淳の「小説の小説」形態を考えていて、牧野と淳の親近関係を探っていたときだが、もとはといえば曾根博義が昭和一〇年前後の「小説の小説」形態の流行を指摘したのが頭にあったからでもある。

というように私の作業は機会を与えられての行きあたりばったり、あれこれ手をつけているうち芋づる式につながってゆくので、それ自体別にどうということもない。がしかし、近代の行きづまりを打破しようと懸命な西欧の知性が、苦しい模索の過程で吐き出した二流、三流の理論にとびついて、それがあてはまる作品がないかと日本の現代文学をキョロキョロ見まわすような態度よりは、よほど実りがあると思わすかに自負している。と書いてしまった以上、もうひそかに、ではなくったわけだ。昔から西洋の理論を頼りの杭とすることが行われてきたのだけれど、もし理論が文学にとって本質的なものなら、それはどんな作品にも適用可能なもので、適用される作品の特質など絶対に照らしだしはしない。つまり作品の相対的価値をはかることは出来ない。

ところでこの相対的価値の計測という方法がどこからきたのかと考えると、私の場合、言語学を近代的な学として

うちたてようとしたときのソシユールからなので、まったく西欧近代そのものののだが、しかし、ソシユールが言語を記号のシステムとしてとらえることを提唱したときには、言語活動そのものを学の対象とすることを断念していた。文学を言語活動の場としてとらえたいというのが私の基本的立場で、要は、理論の水準を見きわめ、適用限界を誤まないことだろう。

と、これは自戒でもある。

(文芸評論家・東洋大学講師)

書誌について

——文庫本を中心に——

大屋 幸世

現在に至るまでの書誌、雑誌細目の充実ぶりには、目を見張るものがある。たとえば雑誌細目では最近、尾形国治氏の『新小説』解説・細目次・索引(昭60・1、不二出版)が出た。長期にわたる雑誌細目を、独力で作製したその労は、想像を超えるものがある。あるいは篠崎富男、紅野敏郎両氏編の『女性改造』(大正期)細目(昭60・1、私家版)も出た。篠崎氏は早大の三年生ということで、細目作製が大學生にまで及んでいるというのは、なんとも驚きである。

一方、個人書誌ということであるなら、日外アソシエツ

の〈人物書誌大系〉は画期的なものとなるのに違いない。浦西和彦氏の『徳永直』(昭57・5)や山内祥史氏の『太宰治』(昭58・7)など、その人を得た立派な業績と言ってよい。それぞれ特色があり、読める書誌といったおもむきもある。

ただ多少注文がないわけではない。それは山内氏が太宰の著書細目を太宰歿後一年で切ってしまったところだ。それ以後のものは、参考文献目録の「解説・後記の類」に一括されてしまっているのが残念である。たとえば文庫本の解説はすべて網羅されているのだから、その文庫本にどんな作品が収録されているのがわからない。多分山内氏は作者の創作の側から見ようとして、歿後一年で著書を切ったのであろうが、作品受容史の面から言ったら、歿後から現在までの著書も重要になつてはこないか。どんな作品が広く読まれているのか、私としてはそれへと関心が向く。

そんな点から、私は一年ほど前『鷗外の文庫本(未定稿)』(『鶴見大学紀要』昭59・2)という書誌を作製してみた。それを通覧してみると、戦前までは鷗外の作品としては多く翻訳と歴史小説、史伝へと関心が向けられているのを知ることができる。あるいは書名に『舞姫』の名があらわれるのは、ようやく昭和二六年になってからである。こんなところにも、『舞姫』の評価史が窺い知れはしないか。

とは言え、鷗外の文庫本という点、昭和二年の岩波文庫開始から半世紀以上の経過があつて、完璧な書誌にはまだなっ

ていない。実物未見など、いくつかの問題点を残している。たとえば、春陽堂文庫の『即興詩人』の存否は今もってわからない。刊行されたい根拠もあれば、存在しないという根拠もある。あるいはこまかいことになるが、世界名作文庫（春陽堂）の『露西亜短篇集』全二冊は実物未見で、滝田貞治『鷗外書誌』によって「第一輯」「第二輯」と記述したところ（内容は戦後の近代文庫が世界名作文庫の紙型をそのまま用いているので推測できる）、のちに実物を得て見ると、単なる「へ1」「へ2」であったなど、記述はやはり実物によらずなくてはならないことを痛感させられた。さらにあらたに知ったことだが、河出書房の市民文庫『森鷗外集』にカヴァー付の「学生サーヴィス版」というのがあった。定価は八〇円が四〇円の半額、多分河出書房の経営と関係があるのだろう。いずれにしても、文庫本の世界はやっぱりいろいろあるが、その半面なかなかおもしろい。たとえば、田山花袋の『東京の三十年』である。今私の手元には、その文庫本が六種ある。多分意外に多いと思われるのに違いない。現在入手できるのは、竹盛天雄氏の注・解説による岩波文庫本（昭56・5）のみであるが、さかのぼって行くと、次が高原二郎氏注・瀬沼茂樹氏解説の潮文庫本（昭47・4）。この二本はともに、現代仮名づかい、漢字新字体である。三つ目が前田晃の注・解説の角川文庫本（昭30・9）であるが、これは歴史的仮名づかい、漢字正字体である。このような回顧録には、索引がぜ

ひとも欲しいところだが、この角川文庫本には、一五頁ばかりのかなり詳細な索引がついていて、これが大きな特色となっている。そしてそれとともに貴重なのが、前田晃の補注だ。花袋より多少年下であるが、彼とかなり親しかった前田晃ゆえのおもしろさがある。たとえば「車掌台」ということは「は、ガタ馬車の後方についてある客の乗降台。やつと両足をのせるに足るだけのもの。馬車が走り出すと、車掌は飛び乗って、そこに立つてゐた」と注をつけている。あるいは独歩追悼演説会の場の、「二階の一室の扉を押すと、T君、N君、Y君、M君などが既に其処に来て集つてゐた。S君も来てゐた」という箇所には、「Tは田村江東、Nは沼波^{なまなみ}_{なまなみ}、Yは柳田国男、Mは前田晃」として、「S君」を「島崎藤村」とするあたり、その場に前田晃自身がいたのだから、正確な注と言つてよからう。もちろんこれらの点は、前田晃注によると明記して、岩波文庫本の竹盛氏注に吸収されているのだが、ひとつの原拠としての価値はこれからも失われぬのに違いない（とはいえ、すべてをそのままに信じてはいけな

だろうが）。ところで、残りの三冊はともに河出書房発行のものである。これらを行順に記して行くと、まず第一が市民文庫本（昭27・11）、次が河出文庫本（昭29・10）、そして最後が河出文庫特装版（昭31・2）となる。もちろんすべて同じ紙型で、解説は正宗白鳥である。特装版のカヴァーには、『東京の三

十年』初版本の表紙絵が用いられていて、なかなか感じがよい。一般的に言って、この時期の文庫本としては、この河出文庫特装版の装丁はかなりしゃれているのではないかと思う。現在の文庫本カヴァーのひとつの原型と言ってもよからう。

ところが、この河出版の文庫本はじつはやつかいなのである。今の『東京の三十年』の場合は刊行過程がすっきりしているのだが、ほかの場合はすこし複雑である。たとえば、永井荷風の『新橋夜話』が私の手元に三冊あるが、ひとつは帯つきの市民文庫（昭26・9）、二つ目は同一年月日発行の、木村荘八の装画カヴァー付の市民文庫、そして三つ目が同一カヴァー付の河出文庫新装版（昭30・9）となる。カヴァー付の市民文庫はめったにないが、これは新装版のカヴァーを作製した折、市民文庫の残部にもかけたものであろうか。その疑問に加えて、三番目のものは特装版としか見えないのだが、奥付に新装版とあるのも異例である。この新装版と特装版とはどう違うのだろうか。

ただこれはほかの河出版を見て行くと、多少わかって来る。中島健蔵編の『現代日本文学事典』（昭29・5）が河出文庫にあるが、さらに特装版とカヴァーに表記された河出文庫（昭30・7）もあり、その奥付には新装版第一刷とある。いわば新装版、特装版が並記されているわけである。そしてその数か月後の昭和三〇年一二月刊の佐藤春夫『田園の憂鬱』はカヴァーに特装版とあって、奥付は単に初版発行とあるの

みである。こう見てくると、河出文庫本の書誌は、河出文庫、同新装版、同特装版という順になるだろう。

ところが、ことはそう単純ではない。新装版以前に特装版があるのだ。手元にあるもので言えば、林武装画カヴァーの宮本顯二『敗北の文学』は、表紙に特装版とあるが、これは昭和三〇年三月刊で、奥付は初版発行とあるだけである。詳細に調べたわけではないが、あるいは『敗北の文学』は河出文庫ではなく、特装版だけであるゆえなのだろうか。

話がごたごたして、微細なことにかかずらわり過ぎたかも知れないが、文庫本の森に分け入って行くと、わからないことがけっこう多いのだ。またそれゆえに面白いとも言える。テキスト面についてもそれが言えるのだが、すでに紙幅をうしなってしまった。別の機会を待ちたい。（疑問の点、ご教示願えれば幸いである）

（鶴見大学教授）

子規記念博物館他 四国(二)

森 田 進

松山市立子規記念博物館

子規記念博物館は、道後公園にある。国鉄松山駅からバスまたは市電に乗って約十五分である。創設は、昭和五十六年四月二日、地下一階、地上四階。

正岡子規が近代文芸史上に残した業績と影響の大きさは測り知れない。と同時に、松山にとっては、「本市の歴史、風土に根ざし、郷里松山の文化をはぐくむ豊かな土壌となった〈人間正岡子規〉」（市長中村時雄）でもある。故に、この博物館（文学館ではない）は、生涯教育都市を目ざす地元の熱望によって建てられたのである。その機能は、「市民の知的教養の場、学校の課外教育の場、研究者の研究機関、観光客のビジターセンター」である。視聴覚室、展示室、閲覧室、講堂、会議室、収蔵庫がある。展示は、「明治の時代を生きた若者子規の全体像を、いかに統一的に再構成し、いかにわかりやすく表現するか」という視点に立って、情報の伝え方に工夫を凝らしている。すなわち、第一次資料（実物）に、

復元資料（レプリカ）や解説、図解図表、写真、音声、映像などの第二次資料を付け加えて立体化されている。子規と漱石ゆかりの愚陀佛庵も復元してある。

事業としては、常設展、特別企画展、あるいは他への協力展、研究会・講座、テレビセミナー（NHK松山との共催）、俳句大会などがある。訪館者は、子どもから老人までいるので、インストラクター（専門案内者）も配置されている。出版・調査活動も盛んであり、博物館友の会も活動している。名実ともに子規センターである。ようやく、市民のための文芸系博物館ができたという実感がある。

松山市道後公園一三〇。電話〇八九九—三一—五五六六。開館時間は午前九時—午後五時。休館日は月曜、祝日の翌日、十月七日。

モラエス館

モラエス館は、国鉄徳島駅前のロープウェイ駅から眉山麓に沿って南へ徒歩十分。山頂駅のすぐ隣りにある。

元来、モラエス資料は県立図書館にあったが、戦災で全資料が焼失してしまった。現在の資料は、すべて戦後地元の熱意によって収集されたものであり、それらを核にして、昭和五十一年七月一日、モラエス館が開館された。

ラファデオ・ハーンと並び称されながらも、ウェンセスラウ・デ・モラエス（一八五四—一九二九）の影は薄い。何故

かというところ、モラエスはポルトガル神戸総領事の地位を捨て、徳島に移住し、無名者としてその生涯を埋めてしまったからである。現在、市内にモラエス旧居跡、モラエス・コハルの墓、おヨネの墓、遺品の仏壇（東海寺）がある。しかし近年、新田次郎の未完の遺作になったり、合作映画になったりして、評価が高まっている。モラエス館には、書斎（遺髪時計、名刺入れ、焼物などが展示）が復元されている。文献としては、「定本モラエス全集」（全五巻、集英社）やモラエスの原書、花野富藏訳の「日本歴史」「極東遊記」「徳島の盆踊」「おヨネと小春」「日本精神」などがあり、アルマンド・マルチンス（ポルトガル大使）の著書類、その他、地元の開国放送やNHKや新聞社、教育委員会が何度も行ってきたモラエス特集の資料も収集されている。

徳島市眉山町茂助ヶ原。電話〇八八六一二二—五三四二。
開館時間は午前九時—午後五時。休館日は火曜。

幸徳秋水文庫（中村市立図書館）

幸徳秋水文庫は、市立図書館の中にある。国鉄中村駅から徒歩で二十分である。バスで六分。

大逆事件の頭目と目され刑死したアナキスト秋水の墓は、市内の墓地にひっそりとあり、最近では香煙が絶えることがない。文庫には、秋水の著書訳書六点、および関係図書文献など約百四十点余りがある。近年、地元を中心に詩碑と記念館

設立の動きがあると聞いている。

中村市大橋通り四—一〇。電話〇八八〇三—五二九二三。
開館時間は午前九時—午後五時。休館日は日曜、祝日、月末日。

（恵泉女学園短期大学教授）

編者紹介

谷沢永一 たにざわ えいいち

昭和四年六月、大阪市に生まれる。昭和三二年、関西大学大学院博士課程終了。現在関西大学教授。

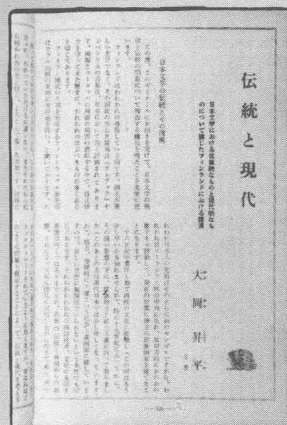
著書『百言百話』（中公新書）、『読書巷談縦横無尽』（講談社文庫）、『雉子も鳴かずば』（集英社）、『円熟期司馬遼太郎エッセンス』（文芸春秋）、『書斎のボ・ト・フ』（潮文庫）、『論より証拠』（潮出版社）。

吉田熙生 よしだ ひろお

昭和五年一〇月、広島県に生まれる。三〇年、東京大学文学部卒業。現在大妻女子大学教授。

著書『近代文学鑑賞講座17 小林秀雄』（角川書店）、『評伝 中原中也』（東京書籍）。

■次回配本■第27巻 井上靖・福永武彦 編者＝曾根博義
昭和60年6月末日発売予定。



大岡昇平「伝統と現代」
 (「中央公論」昭和46年10月号)



伊藤整「近代日本における『愛』の虚偽」
 (「思想」409号 昭和37年7月号)



十返肇「文芸雑誌論」
 (「文学界」昭和31年11月号)



桶谷秀昭「崩壊する『私』」
 (「文芸」昭和48年4月号)



中村幸彦「幕末文壇における近代的傾向」
 (香川県高校国語研究会「国語」第15号 昭和37年11月)



吉本隆明「現代詩批評の問題」
 (「文学」昭和31年12月号)



時代像の崩壊

山崎正和

山崎正和

山崎正和「時代像の昏迷」
 (「新潮」昭和55年11月号)



氣質の魔

氣質の魔と詩人

亀井秀雄

亀井秀雄「氣質の魔」
 (「群像」昭和56年11月号)



占領の二重構造

磯田光一

磯田光一「占領の二重構造」
 (「新潮」昭和56年3月号)

漱石と山の手空間

己をみるに

前田愛

前田愛「山の手奥」
 (「講座夏目漱石第四巻漱石の時代と社会」有斐閣 昭和57年2月)

みだれ髪の手紙

晶子と同時代の歌人達

芳賀徹



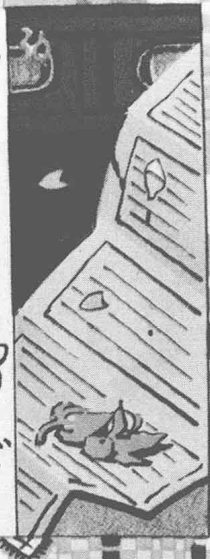
芳賀徹「みだれ髪の手紙」
 (「短歌研究」昭和53年8月号)

肉体のなかの近代

高橋英夫

高橋英夫「肉体のなかの近代」
 (「文学界」昭和54年12月)

ふらふらと夢をうめ
さまたけの窓より
袖ふれて経くづしぬ



たまに髪をひもとち
きりー音をひびくや
なごー春の夜に夢



賣りし琴をむづびの曲
をのせーいびき逢魔
かどき乃黒百合折れぬ



ふたとおろし君を待たせ
こころをいびく花
聖の夕月夜に南



目 次

幕末文壇における近代的傾向

文学者となる法

近代日本における「愛」の虚偽

氣質の魔

みだれ髪の様譜

山の手の奥

肉体のなかの近代

私小説の二律背反

崩壊する「私」

占領の二重構造

文芸雑誌論

時代像の昏迷

現代詩批評の問題

中村幸彦 五

内田魯庵 三〇

伊藤 整 一四

亀井秀雄 一五

芳賀 徹 一五

前田 愛 一八

高橋英夫 二〇

平野 謙 二四

桶谷秀昭 二六

磯田光一 二九

十返 肇 二九

山崎正和 三〇

吉本隆明 三九